

『第2回 佐賀市立小・中学校のあり方検討委員会』
会 議 録

開 催 日	令和8年5月11日（月）	
開催時間	午後6時00分～午後7時25分	
開催場所	佐賀市役所大財別館4階 4－3会議室	
出席者	委員等	嘉村委員長、草場副委員長、小城原委員、梅崎委員、辻委員、江口委員、森委員、釋委員、川副委員、下川委員
	事務局等	丹宗教育長、堤教育委員（教育長職務代理者）、槇原教育委員、横田教育部長、岩瀬副部長兼教育総務課長、川副学事課長、水田学事課副課長兼学務係長、湊上学校教育課長、野中学校教育課義務教育指導係長、（担当 教育総務課）江口、堤
議 事	議題 佐賀市立小・中学校の望ましい教育環境について	
欠 席 委 員	中尾委員	
傍 聴 者	1名	

議 事

1 開会

2 教育長挨拶

3 議題

佐賀市立小・中学校の望ましい教育環境について

(事務局)

- ・資料1に沿って、佐賀市立小・中学校の望ましい教育環境について説明

(委員長)

- ・事務局から第1回目の質問に対する回答と資料1に沿って説明があった。
事務局の説明に対して、確認したい点や質問があればお願いしたい。

～特になし～

(委員長)

- ・まず前提として、佐賀市の学校教育ビジョンについての共通理解が必要だと思う。
- ・この学校教育ビジョンを達成していくことが望ましい環境につながっていくという共通理解でスタートしてよろしいか。
- ・まずは、学校現場からの意見をお願いしたい。

(委員)

- ・これからの時代に生きていく子どもたちの学びの質を保障し、教育ビジョンにあるジレンマを乗り越え合意形成する「尊重」、そして「創造力」、「自律」を身につけるために、今日の議論の視点である望ましい教育環境を考えたときに、小規模校も大規模校も経験した上で、資料の利点や課題で挙げられたように、ある程度の人数がいた方が子どもの学びといったものについては、質が高まるという感覚を持っている。
- ・小規模校の場合、人間関係が固定化してしまい、それが改善できず、場合によっては転校を余儀なくされる場合もあるということを考えたときに、ある程度、学級編制できる規模、人数の方が適正ではないかという気がしている。
一方で、ある程度の規模の人数を確保しつつ、ジレンマ、あるいはその合意形成を促していき、自律をさせるといった時に、職員の数が非常に重要になっていく。
つまり学びの質を担保するためには、職員の数が一定数担保されていないと非常に難しい時代になっている。
- ・多様な背景を持つ子ども、あるいは、職員の大量採用・大量退職を考えた時に、小学校の場合、今までのように一人の教員が一つの学級を持ち対応していくことは難しい。
- ・あるいは教科担任制を進めていく場合でも、法で定められた職員定数以外の人数が必要なのではないかと思う。
- ・安心安全が確保された上での学校運営が議論のポイントになってくると考えてい

る。

(委員)

- ・学校生活というところで、勤務している中学校では2つの小学校から1クラス20名程度の子どもたちが上がってくる。人間関係が固定した状態で中学校に上がってくるため、子どもたちが仲間を作る前に摩擦が起きてしまうという悩みがある。
- ・原因を考えたときに、同じ学年でも子どもたちの発達段階が違う、大人のような考えをする子やそうでない子もいるような気がする。
- ・クラス替えがなく6年間過ごすと、この子はこういう子だというカラーがついた状況で中学校に上がってしまい、またそのカラーが中学校でも広がってしまう。
- ・最低学年3クラスあると、子どもたちもいろいろな意見に触れて、活躍の場が出てくると思う。
- ・例えばグループ活動でも、小学校の段階からもっと多様な意見に触れ合うという経験をした上で、中学校に上がってきてくれると、もっと義務教育の終わりの段階ということで、子どもたちを育てられると思っている。
- ・中学校は教科担任制になってしまうため、特に5教科で複数配置をした方がよい。例えば若手の先生が一人来られた場合、指導について悩まれている、隣に聞く先生がいないという悩みがある。私も悩んだ時に誰にも聞くことができなかった経験がある。
- ・5教科の教員は授業時間数が多く、先輩・同僚がいたら相談し、参考にして自分の授業にフィードバックすることができるため、学級規模はある一定程度あった方が教員にとっても良いと思う。また、教員が出産・育児休暇を取得されて、代替教員が来られる時も、その教科にもう一人の教員がいたら、うまくつながりができるかと思う。そういうところも含めて、教科に関しては複数配置があった方が良く思っている。
- ・小学校について、北山校勤務のとき、特に小学校1年生・2年生の複式学級を見ていて大変だと思っていた。1年生は足し算やひらがな書く授業をしている横で、2年生は九九を教えなければならない。

(委員)

- ・私も小規模校に勤務しており、子どもたちの人数が少なく、交流の機会が少ないと感じる。
- ・特に授業中の対話活動において、佐賀市の教育ビジョンにもある3つの力の一つ「尊重」、対立やジレンマ乗り越えて合意形成をする力があるが、1クラス10人ぐらいの小規模校では、多様な考えに触れたり、考えを深め、広めたりする機会を持たせてやりたいが、難しいところがあると感じている。
- ・1学年7学級ある大規模校、2～3学級ある中規模校、そして今、各学年単学級の小規模校を経験してきて、小規模校の難しさは、多様な考えに触れる機会がないことであり、今まさしくその問題に直面している。
- ・道徳の授業で多様な考えに触れさせて、考えを幅広くさせていきたいところである

が、やはり人数がいらないため、それができない。AIを使ったり、2学年合同の道徳を行ったり先生たちも工夫しているが、ずっと固定化した関係の中では、誰がどんな意見を言うか子どもたち自身でも分かっているような状況で、そして付度しながら意見を出す状況である。

- ・先生同士でも固定化された人間関係の中で行う道徳の授業は難しいと話している。
- ・小さな学校の良さも多くあるが、人数が少ないことで、多様な考えに触れる経験は難しいと感じている。
- ・各教科（国語、数学、理科、社会、英語）1人という状況は教員にとっても難しいところがある。
- ・新規採用の教員も入ってくる中、初任者研修の先生もいるが、仕事をやりながら、一緒に教科を教えながら、OJT中で養成していくことは難しい。それは、小さな学校の大変な部分でもあると思っている。

（委員）

- ・本日「これからの学校を考える講演会」に参加した。今日のこの会議にふさわしい講演会だった。
- ・いろいろなメリットとデメリットがある中で、何を作り出して、何を諦めるかとかいうような話もあり、最終的には子どもを中心に考えると答えが出るという内容で私もそのように思った。
- ・答えがなく急速な変化の中で生きていく子どもたちに、教師が一方的に知識を注入するという授業が続いていても、物事を解決する術を持たせてやれない。
- ・私が勤務している学校では、多くのクラスで学び合いの授業が行われており、子どもたちに5つの「かける」を意識しようと伝えている。1つ目が「気をかける」、2つ目が「目をかける」、3つ目が「声をかける」、4つ目が「時間をかける」、5つ目が「相手に対して願いをかける」を掲げ、誰一人取り残さない授業を展開して、学び合いの中で、互いにその問いを出し、協働しながら解決し、誰もわからなかった者がいないかを最後に子どもたち同士で確認している。
- ・授業の中で、子どもたちが得なければいけない力というのは、これまでの一方的に知識を注入していくというような授業のスタイルでは得られない力ではないかと思っている。また学校では「新学習指導要領」で軸になると言われている探究的な学びを進めている。そこでは多様な他者と協働しながら、問いに対して解決をしていくという学びになっている。
- ・ある程度の人数が確保をされていないと、多様な学びを日常的に得られる機会がなく、あえてそういうイベントを作り出さないと多様な学びができないという状況になると思う。
- ・本日の講演会では特別支援学級の話も出た。周りの子どもたちが、特別支援学級を育てており、その周りの子どもたちも成長するということもある。障がいを経験した子どもに変えていく教育を行っていくことは、実はそれを支えている周りの子どもも育てていくという話であった。
- ・学校で多様な人と一緒に生活をしていたことで、子どもたちが社会に出たときに、

困難を予測していけるのではないかと思う。

(委員長)

- ・続いて保護者からのご意見を伺いたい。

(委員)

- ・先生が足りないというところは、無視できない問題と思う。学校教育ビジョンや規模や配置などの教育環境を考えて上で、それを実行していく先生たちが配置されているのか同時に考えていく必要があると思う。
- ・学校教育ビジョンも例えばある指標や基準があると、それと並行して、先生の働き方も進捗していくと思う。
- ・学びの質、学校生活、教育活動、教職員体制、通学条件、この全ての土台が学校の先生の適正配置であると思う。県外では教員採用定者の7割が辞退するなど、教育長が街頭に立って「学校の先生になってください」と言う非常事態になっている。こういう問題は無視できないと思う。
- ・大規模校は先生が揃っている、小規模校では先生が少ないなど、格差があると思う。
- ・佐賀市の学校の先生たちが適正に配置されて、授業のコマ数や負担なく子どもたちに迎え向き合えるような状況が確保されているのかを同時に考えていくべきと思う。
- ・先生たちが不足していれば、地域や保護者が手助けをせざるを得ない。そういうところも踏まえて検討していく必要があるかと思う。

(委員)

- ・私の子どもは小学校1年生から6年生まで1クラス3名、中学校に上がった時には1名減って2名で学校生活を過ごした。
- ・中学校では偶然にも、もう一人の方と良い交友関係であったが、相性の悪い方であったら、転校などを考えていかないといけないと思った。
- ・その分、先輩や後輩との関わり方について学べたのではないかと思う。同じクラスにはもう1人しかいないため、先輩や後輩と遊んだりすることでコミュニケーションの取り方を学び上手になったと思う。
- ・高校に進学したが、年齢の幅に関係なく、人付き合いがうまくできるようになったと保護者目線として感じている。
- ・少人数の良さもあるが、部活動や集団活動ができないことが小規模校のデメリットであると思う。サッカーなどはまずできない。富士町には3つの中学校があるが、たとえば1つにまとめても試合に参加できる人数にならない。それくらい山間部は人数が少なく、保護者目線でも一番気になるところ。
- ・中学生になると、部活動で団体競技ができない。高校に進学し、部活動を選択する場合、サッカーや野球などは経験者が多く、高校からサッカーや野球をすることは選択肢に入らない。
- ・子どもたちの小さかった時の夢を叶えさせてやれないというのは残念である。

(委員長)

- ・続いて地域の立場からご意見を伺いたい。

(委員)

- ・学校だけの問題ではなく、家庭の問題もあると思う。生まれてから言葉を覚えていく段階で保護者や周りが知識を教えないときちんと育たないと思う。塾や人任せにしていることが多い。その辺を含めて考えていかないといけないと思う。
- ・学校に複数の先生がいれば、いろいろなことを学べるし、同時に子どもを真ん中にして学校と家庭、地域と一緒にやっていると非常に難しくなっている。
- ・小規模校だけが難しいのではなく、大規模校でも学校・家庭・地域の問題はある。
- ・小学校は30分以内で行けるところが良い、それ以上になると子どもたち・保護者も大変になると思う。
- ・小規模校ではコミュニケーションをどうしていくのか、私たちの時代は、兄弟でそういう教育があったが、今はそれがなくて、学校に頼らないといけない。
- ・学校の授業の中でいろいろなことを学んでいく。その基礎を作るのが保護者だと私は思っている。

(委員)

- ・三瀬では子どもだけでなく人口を増やしていこうということで、まちづくり協議会で一生懸命がんばっている。3年前の小学校の入学式は1人だけだったので、今年Uターンで子どもが3名戻ってきて大変嬉しかった。
- ・子どもが増えたということは一番良い。子どもの声が聞こえないところは、だんだん過疎になるというのが一番寂しい。
- ・3年前に横浜の中学生が修学旅行で唐津市に来ており、学校と旅行会社と話し合い、その内4名ほどの生徒が三瀬に宿泊した。三瀬に来る子どもが増えたと思って喜んでいる。
- ・交通手段ということで、三瀬の高校生はコミュニティバスを利用して通学している。また、三瀬・神埼線（路線バス）を利用して神埼駅へ行き、その後JRを利用して市内の学校に通っている高校生が4～5人いる。

(委員長)

- ・本日は、佐賀市学校教育ビジョンを実現することが、子どもたちが幸せになり、望ましい教育環境になるということ。そして、望ましい教育環境をつくるための規模や教職員の配置数などについて意見をいただいた。
- ・多様な学び、資料に示されているような学びの質などを高めていくには、ある一定程度の子どもの数が必要ではないかという意見が多かった。
- ・教員不足についても、現実的に厳しい問題であり、県全体で教員不足が偏らないように、県や市が考えてやっているが、学校でやらないといけないことが出てきている現状はあると思う。

- ・この部分の議論は、できるだけ子どもが幸せであるためにはという目線で、教員不足の現実を埋めるのはなかなか厳しいが、教員数を増やすことは大事なこと。
- ・子どもの教育環境という視点から言うと、ある一定程度の子ども数がいて、1学年に複数のクラス数が成立するような環境が整っていた方が、佐賀市がやりたい教育活動というのが実現しやすいというところは、委員の皆さんと一致した意見と思う。

(委員)

- ・私もそのように思う。教職員の適正配置と規模は両輪であると思う。どちらが先でもなく、どちらかを大きくしてしまうと、うまく進まない。両方が揃わないとうまくいかない。
- ・子どもの人数がある程度揃ったらいいいわけではなく、もう一方（教職員配置）が崩れてしまえば、子どもの人数に関係なく、子どもたちのジレンマを上手に扱うことすらできなくなってしまう。
- ・学校教育ビジョンに向かって進むためには、両輪がしっかりまわるように、教職員体制を整えて議論を進めていくことは非常に重要なことだと思う。

(委員)

- ・地域コミュニティの規模も子どもたちに影響すると思う。
- ・先日、諸富町で地区運動会があり、生徒からボランティアを募集した際、40名程度参加があった。中学校で約200名の生徒がいるので、5分の1くらいの生徒が自主的に参加している。
- ・積極的に地域の方が子どもを受け入れてくれる地区。それによって、子どもたちも地域でいろいろな活動をする。地域の方も、学校に対して様々なかたちで支援していただいている状況である。
- ・そう考えると学校だけの規模ではなく、校区の規模も大切だと思う。
- ・家庭と学校と地域の連携が非常に大切だと思っている。
- ・北山校に勤務していたときは、子どもたちがボランティアをする機会が少なかったと思う。
- ・諸富地区の子どもたちは非常に恵まれており、地域に出て地域の方と触れ合い、いろいろな地域の方とコミュニケーションし、いろいろなものを得ていると思う。
- ・その経験が将来の進路決定につながっているように見える。

(委員長)

- ・委員のみなさんのご意見を振り返ると、ある一定程度の子どもがいないと資料10ページにある教育環境が整わない、そして望ましい環境を作るためにはある一定程度の子ども数が必要であるということ。教職員体制についても、両輪でまわしていけないといけないという意見があった。
- ・教員の専門性を高めていくためには、1つの学校に教科担任が1人より2人、3人いたほうが専門性は高まっていく、部活動においても団体スポーツでチームが

形成できるくらいの子どもたちがいたほうが良い、集団活動などの学びの幅が広がっていくという意見があった。

- ・学びの質、学校生活、教育活動などの視点から、具体的に1学年のクラス数があったほうが良いなど意見があればいただきたい。

(委員)

- ・「学びの質」というところで、学級数は1学年3クラス程度は必要ではないかと思う。クラスとしては25～30人程度、クラス替えができ、かつ人間関係を考えると1学年2クラスでは限界がある。3クラスだと物理的にある程度離すことができる。そう考えると3クラス程度が良い。
- ・教職員の視点では、小学校の場合、1学年3学級に対して、教員3人ではとても対応できない。もう1人、もしくは1クラス2名ずつ3学級を6名の教員で対応していくほうが良いと思う。そういった柔軟な学級編制の方が子どもの学びやすい授業の時間割などが可能だと実感として思う。

(委員長)

- ・具体的に1学年3クラス程度という数字が出てきたが、その程度の規模があったほうが、子ども目線では教育活動を充実したものにできる、多様な意見に触れられる、人間関係でうまくいかなかったときにクラス替えができるなど柔軟な対応ができるということであった。
教職員体制についても、教員不足をなんとかしないと、学びの質も充実させることができないという意見でした。

(委員)

- ・例えば小学校で1コマ45分授業、先生の授業の準備は45分ではできない。先生の職場環境の改善を行っていければ、子どもたちは、先生がしっかり準備してくれた授業を受け、より探求的な学びができると思う。
- ・授業1コマの表に出てくる部分ではなく、先生たちの裏で努力している事務作業などを踏まえ検討していく必要があると思う。

(委員長)

- ・事務局から教職員の負担軽減など佐賀市が取り組んでいる現状があればお願いしたい。

(事務局)

- ・職員の配置について「教員業務支援員」がある。1日3時間程度、大規模校に配置し、テストの採点や資料のコピーなど補助をしてもらうための予算措置をしている。
- ・昨年度から本格的にICTを活用した「校務支援システム」、また、それと連動して、「学校出欠連絡アプリ」も導入している。今まで朝の出欠連絡を電話でしていたも

のがスマホ・パソコンからできる仕組みになった。

- ・特別支援学級や通級指導教室を利用する児童生徒の自立活動の指導を充実するため「コグトレオンライン」を導入している。
- ・いじめや悩みなどを「WEB QU（ウェブ・キューキュー）」を使って回答してもらい把握する仕組みなどを導入している。
- ・全国的に部活動の地域展開ということで、佐賀市では部活動の時間と質の適正を図っていくため「佐賀市モデル」を実施している。具体的には、部活動の時間を週8時間、子どもたちが主体的に考えて部活動に参加できる仕組みで、昨年度から全中学校で実施している。
- ・今年度から先生の負担軽減ということで、水泳授業の民間委託事業を4校で試行的に実施する予定。
- ・教員の業務の負担軽減については、人の配置だけではなく、いろいろな仕組みを活用して行っていきたいと思う。

（委員）

- ・意見が出たように、小学校では1学年3クラス程度だったらクラス替えができる。中学校では4クラス程度、3学年で12クラス程度あると先生も専門性を持ちやすいと思う。1学年3クラス程度で学級担任を持たない先生がいると、1学年4人程度で、子どもたちに目が行き届きやすい。
- ・児童生徒の中でも交流をしながら、多様な考え方ができると経験上感じている。
- ・私は小学校で1学年の5クラス、中学校で7～8クラスを経験したが、1度も一緒にのクラスにならないと、顔はわかるが、名前はよく覚えていないようなことがある。
- ・少人数の場合は、深い付き合いができるが、高校に進学した時にちょっと人見知りになるということもあると思う。
- ・クラス替えなどで自分との違いを見つけられる機会は、ある程度必要だと思う。社会に出た時に地域にはいろいろな方や年齢の方いる。
- ・仕事をする中でもいろいろな人とチームを組んでいかなければいけない。
- ・小学校で1学年3クラス程度が、経験上望ましい規模だと思う。
- ・最近小学校の5・6年生の部分で教科担任制が導入されている。以前から音楽や理科では専科教員がいたが、なおかつ他の複数の教科で教科担任制ができれば良いという考えでは、小学校1学年2クラスだと教員の数が足りないと思う。
- ・1学年3学級～4学級程度が、一つの目安だと思う。

（委員長）

- ・第2回の会議では、望ましい教育環境について議論するというので、具体的な数字も会議の後半に出てきた。
- ・学校の規模・配置、通学条件などの具体的な意見を次回お願いしたい。
- ・小学校・中学校でも、ある一定程度の児童生徒の数が必要というところで、委員のみなさまから事務局に準備してほしい資料があればお願いします。

(委員)

- ・他市町で学校を統合して、その後のメリット・デメリットが出ているものがあれば、議論しやすいかもしれない。

(委員長)

- ・事務局で検討していただき、可能な限り対応していただければと思う。

(委員)

- ・先生たちの時間外の平均在校時間について出せるものがあれば、知りたい。

(事務局)

- ・時間外の在校時間については、出せるかと思う。

(委員長)

- ・本日予定されていた議事はすべて終了する。
- ・次回もよろしくお願いいたします。

4 閉会